

外国語学習の動機に関わる要因 アンケート・面接調査結果による一考察

楠木 理香 工藤 多恵

要旨

学習において、動機づけを高めるには様々な要因が考えられるが、動機が高ければ高いほど、学習プロセスに肯定的な影響を与えるであろう。本研究では、まず予備調査として学生にインタビューを実施し、各々の外国語の授業に対してやる気が異なるかどうかを中心に尋ね、なぜやる気が変わると思うかを聞いた（日本語学習者11名、英語学習者12名、それぞれ1時間～1時間半のインタビュー）。次に、これらのインタビュー結果から、共通した意見や内容を抽出し、アンケートを作成した。その後、約100名の学生にアンケート調査をし、実際に教師と学生の心理的距離が近く、関わりが多ければ、動機が高くなるかどうかを調査した。最後に、学生の動機が高くなる要因についてKJ法を用いて分類した。その中でも多数を占めた教師の部分に特に注目し、教師の存在が学生の動機づけにどのような影響を及ぼすのかを考察する。

キーワード

外国語学習、動機づけ、やる気、教師、心理的距離

1. はじめに

日々学生と対面している教師にとって、「いい授業をしたい」というのは、漠然すぎるとはいえ、教育機関、担当科目に拘らず共通の思いであ

る。そこで自らが学生だったころの様々な授業の中から、どのようなものが「いい授業」だったか、を参考にしようと省みる。楽しかった授業、勉強になった授業、達成感がある授業……。記憶の中の「いい授業」は様々だが、それらの全てが結局のところ、その授業に行きたいと思っていた、つまり、行くのが楽しみだった、の一点に尽きることに思いが至る。では、学生が「行きたい」と思う授業、「行くのが楽しみだ」と感じる授業とは、どのような授業なのか。

学習において、動機づけを高めるには様々な要因が考えられるが、動機が高ければ高いほど、学習プロセスに肯定的な影響を与えるであろう。「動機づけは、学習にとって必要条件である」とウラッドコースキー(1991)も述べている。個人によって動機づけを高める要因は異なるであろうが、具体的にどのようなものがあるのか。本研究では、大学の外国語の授業に対する学生のやる気には、どのような要因が影響するのかを考察する。

2．研究の背景

2 - 1．外国語の学習動機

外国語学習の動機について、Gardner (1985) は、目標言語の文化に対する興味関心という他民族への態度を基礎とした「統合的動機付け」と、将来の仕事やテスト、よい成績をとるためなどの実用的な目的を意味する「道具的動機付け」に二分する考え方を提唱した。その後、Brown (1994) は動機を、「外発的動機付け」と「内発的動機付け」の二分法で整理する考え方を示した。Dörnyei (2001) によると、内発的動機¹⁾とは、それをする事自体が目的で何かをすること、それをする事自体から喜びや満足感が得られるような行動に関連した動機であり、外発的動機²⁾とは、金銭的な報酬や他者に認められることなど、何らかの具体的な目

のを達成する手段として行う行動に関連した動機である (p27)。学習に関しては、内発的動機をもたせることが好ましいと考えられており、努力や成果に対して報酬を与えることは、報酬のための行動を促すことであり、望ましくないとされてきた。その後、この二分法を細分化する理論が見られた。Vallerand (1997) は内発的動機に、知識、達成感、刺激の3つの側面があるとし、Deci and Ryan (1985) は、自己決定の度合いにより外発的動機を「外的調整」、「投入的調整」、「同一視的調整」の3つに分類した。上述のような社会心理学的な動機研究に加えて、1990年代以降は、教育心理学的な理論を用いた研究も注目されるようになってきている。

2 - 2 . 外国語学習の動機にかかわる要因

外国語学習の動機にかかわる要因について、Noels, Clément, and Pelletier (1999) は、教師のコミュニケーションスタイルが非統制的、あるいは情動的と認知している学習者ほど、内的に動機づけられる傾向にあると示し、教師のコミュニケーションスタイルが学習者の動機の要因として重要なものであると述べた。また、廣森 (2005) は、自己決定理論における学習者の自律性、有能性、関係性の各要因が、外国語学習者の「動機づけ要因」としての働きを持っていると示し、この3つの要因を満たす学習活動の例を紹介している。

これらの研究は、教育者にとって動機づけの根源を知ることが非常に重要だとしたOxford and Shearin (1994) の提言に、いくらかの答えを見出したことは言うまでもない。しかしながら、実際の教育場面や教室活動にどのようにそれらの要因を組み込み、学習者に働きかけていくのかについて、教師にとっては具体的な提言がさらに望まれる感があることは否めない。

以上のように、これまでの外国語学習の動機の研究では、外国語を学習し始める（またはし始めた）動機について、また長期的にみた外国語学習全体について語られていることが多い。英語学習の場合では、字幕なしでハリウッド映画を見てみたいから、という単純な理由がきっかけであったり、また、将来日本で就職したいから日本語を勉強したい、というようなものである。しかし、日々の大学での外国語授業において、常に学生たちがこのような初心の動機を維持しているとは考えにくい。八島（2004）も、この点については英語の“motive”と日本語の「動機」の概念の微妙なズレが、動機の研究において混乱を招く原因となると指摘している（p65）。つまり、英語では学習意欲そのものを指す“motivation”と、学習の理由や目的を指す“goal”あるいは“orientation”という別の用語が存在するのに対し、日本語ではそれらを全て「動機」と呼んでいるというのである。また、河合（1999）も、これまでの研究は「外国語学習の目的に関わる静的な要素が多く、学習者が、学習の過程で動機付けをどう変化させていくかに関する研究はまだほとんどない」というDörnyeiの言葉³⁾を紹介し、その違いについて示唆している。

以上のように考えると、本研究で注目する研究の対象は、大学における個々の外国語の授業へのやる気（英語で言う“motivation”）であり、長期的に見た外国語学習の理由や目的を表す動機（英語で言う“goal”“orientation”）とは性質を異にする。大学の外国語のクラスには、必修だから、いい成績がとりやすいからなどという外発的動機付けを持っている学生と、外国の人たちとコミュニケーションを取れるようになりたいから、他の文化を学びたいからという内発的な動機付けを持っている学生とが混在していると考えられる。が、本研究では、そのような学生たちの当初の学習理由や目的ではなく、現在の外国語授業に対する意欲、やる気に注目するためである。実際の外国語の授業という場面に注目し、学生のやる気について調査、考察することは、外国語教師にも今までに

ない貴重な視点を与えてくれると考える。そこで本研究では、実際の授業に対する「やる気」を外国語学習における理由、目的を表す「動機」と混同させないために、以下より「やる気」として表すこととする。

以上のことから、本研究は、具体的に以下の点について調査をし、考察を加えることを目的とする。

1. 外国語の授業において、やる気の違いがあるか
2. 違いがあるとすれば、何が要因となっているのか
3. 教師として、何ができるのか

学生たちは実際の授業へのやる気を自らどのように捉えているのだろうか。「やる気ある?」「だるいなあ」などという学生の言葉をキャンパス内で耳にすることはあるが、授業に対するやる気はどこから芽生えるのか。どのようなことが要因となり、やる気につながるのか。学生たちは、自分では意識しているのだろうか。そのような点を明らかにするために、まず、授業によってやる気の違いがあるか、その要因が何か意識しているか、の2点について、予備調査を行った。

3. 予備調査

3-1. 調査方法

調査は、関西の私立大学で外国語を必修受講している1年生23名(日本人の英語受講者12名、留学生の日本語受講者11名)を3人ずつ⁴⁾の8グループに分けて面接方式で行った。対象となった学生は、面接を設定した時間に都合がよく、面接の趣旨を説明した上で引き受けてくれた学生である。3人のグループは、なるべく面接が学生にとって話しやすく、緊張感のない雰囲気になるように、普段から仲のいい間柄の友達とした。

面接は、学生3人グループに筆者いずれかが1人で約1時間行った。尚、面接を行った筆者と学生らは、全て初対面である。

3 - 2 . 調査目的

先行研究からも明らかのように、動機というと、外国語を学習し始める（またはし始めた）動機について、また長期的にみた外国語学習全体について語られることが多い。が、本研究の目的は、各授業について学生がやる気を持っているかを調査することである。そこでまず、予備調査として、外国語を必修科目として大学で履修する学生に面接を行い、各外国語の授業へのやる気が異なるかをきいた。また、やる気が異なる場合、その要因となっているものについて、自分で気がついているか、意識をしているかをきいた。

3 - 3 . 調査内容

面接は、現在の外国語のクラスにやる気を持って取り組んでいるか、やる気に違いが出る場合はその要因がわかっているか、それは何だと考えるか、などの質問をこちらが投げかけ、それに自由に答えてもらう形式で進んだ。インタビューでのやり取りは学生の理解を得て全て録音し、後に筆者らが書きおこして、分析した。

3 - 4 . 調査結果

面接の結果、23名全ての学生がそれぞれの外国語の授業に対してやる気が異なると答えた。「では、同じ外国語の授業なのになぜやる気が変わるか、気がついてますか」と聞いたところ、友人と一緒に自由会話形式だけに、様々な意見が出た。始めは「なぜかわからない」と首をかしげていた学生も、グループの1人が気づいていることについて話し出すと、そこから話題も広がっていった。そこで、授業に対するやる気に影

響を及ぼす要因として、学生が挙げたものを以下に示す。尚、これは予備調査であり、「やる気が異なるか」、「それを学生が意識しているか」を調べることを目的としている面接調査であるため、以下は挙げられた回数に拘わらず、順不同である。

教師が学生の名前を覚えているか、または覚えようとしているかどうか

これは、ほとんどの学生が面接の中で自主的に発言したものである。あるいは、面接の中で1人がこの点について発言した際、同意するかと他の2人にも尋ねたところ、全面接中、反対したものは1人もいなかった。つまり、教師が学生の名前を覚えているクラスと、覚えていないクラスとでは、全員が授業に対するやる気が違うと感じていることがわかる。理由としては、「覚えてもらっているとうれしいし、自分のことを見てもらっているので頑張ろうという気になる」という意見が多かった。反面、中には「覚えられていると緊張して、勉強しなければならないという義務感が強くなるから」、「さぼっていることがばれそうだから」という意見もあった。

教師からのフィードバックやメール連絡などがあるか

授業で課される課題や作文などが返却される際に、丁寧なコメント、特に自分個人についてのコメントがあるのは大きなやる気につながると答えた学生が多かった。また、事務的で些細なことでも教師からメールをもらったりすると、授業に対するやる気につながるといった意見が出た。この点については、大学では、ないのが当たり前だという意見もあり、実際にこのような経験が今までに全くない学生もいた。そのような学生からは、必ずしも否定的な意見（「してもらえないからやる気が出ない」など）は出なかったが、経験がある学生たちが、そのような教師からの

働きかけを大きなやる気の要因として捉えていることは確かであると思われる。

教師と勉強以外の話ができる、またはしたいと思うか

「授業中、あるいは授業外で、勉強以外の話をしてくれる先生、あるいはしたいと思う先生の授業は、興味も持てるし、やる気が出る」という意見が出た。具体的には、教師の私生活、大学時代、留学経験、外国語学習経験などという話が出た。これは、ジュラード（1971）が「個人的な情報を他者に知らせる行為」と定義した自己開示であると言えよう。つまり、「自分がどんな人物であり、今何を考え、何を感じ、何を悩み、何を夢見ているのか、といったことを相手に伝えること」（榎本：2004：10）が自己開示であり、その必要性については、「学校教育の実践の場において、生徒と教師のよりよい人間関係を樹立するために、教師の自己開示特性は重要な要因となっている」（p143）と山口（1995）も述べている。以後、学生のやる気に影響を与える要因として、注目すべき点であろうと考えられる。一方、少数ではあるが、「授業中は勉強の話だけがよい」「授業外で先生と話すのは緊張する」という意見もみられた。

教師

「授業によってやる気が変わるのはなぜだと思いますか」という問いに、「先生」と即答した学生がいたグループが半分ほどあった。それは教師のどのような部分なのか、具体例として出てきたのが上記の～であると考えられるが、その他に「話がおもしろい/楽しい先生」「明るい先生」「好きな先生」「気が合う先生」「話しやすい先生」「仲がいい先生」など、回答が主観的でその詳細に踏み込まず、分類することが難しいものや、個人的な価値観によって意見が変わる回答も次々にあがった。これらは学生の個人的な趣味や嗜好、性格にも大きく関わり、主観的な印

象であることも多いことから、予備調査の段階では細かく分類はしないこととした。しかしながら、教師としては、学生の授業に対するやる気が、このように教師の人間の魅力、あるいは印象に深く関わっている事実にも目を背けるべきではないだろう。

授業内容

授業の内容によってやる気が変わるという意見は、当然ながら出た。外国語の授業で言えば、読解、聴解、作文、会話、コミュニケーションなどと、技能別、目的別に開講されていることが多い。実際、今回の面接に協力してくれた学生も、全員が1週間に3つの外国語のクラスを受講しており、その3つ全てが技能によって異なった授業だと答えている。そこで、読解はやる気が出るが、作文はちょっと・・・という現象も起こりうる。ここには、各学生の「好き/嫌い」あるいは「得手/不得手」といった要因が大きく絡んでくるようである。また、授業の難易度がやる気と関係があるという意見もあった。しかしながら、簡単であれば楽にできるのでやる気が出るというものでもないようである。事実、知的好奇心を喚ばれるような、ある程度難しい内容のほうがかえってやる気が出るという意見が多かった。

成績

大学では当然のことと言えるかもしれないが、単位あるいは成績のためにやる気を持続させているという学生も多かった。ウラッドコースキー(1991)も、「履修の必要性が非常に強い生徒の場合、その教科の実践的な使用価値を感じなくても、疎外感や孤独感の支配するクラスにいて、うんざりする教師に辛抱しても、さらに達成感や上達感を持つことができなくても、学習を続けていくかもしれない」(p16)と述べている。これはいわば強制的義務感からのやらねばという思いであり、Brown

(1994)の言う外発的動機に分類されるものである。教師としては、このような義務感からくる外発的動機だけではなく、学習者が自らの興味と自発性に基づいて深い理解を求めていくような主体的な態度、いわゆる内発的動機もともに持ち合わせてほしいと願いたい。しかし、「成績のつけ方が公平である」「成績のつけ方が明確である」「努力が成績に反映される」などというのが、成績に関する「やる気をもてる授業」についての意見である。これらを見ると、学習者の外発的動機にかかわる部分にも、教師としてできることがあるはずであろうと考える。

3 - 5 . ま と め

話しやすい友達と一緒に自由に会話をするという雰囲気重視のため、話題は多岐におよび、学生たちも率直な意見を述べてくれた。数多く得られた意見や、グループ内で話題として詳細に及んだポイントは、上述のとおりである。以下に、予備調査より得られた結果をまとめる。

- 1 . 全ての学生が授業によってやる気が異なる
- 2 . やる気が異なる要因については、意識している場合と意識していない場合がある
- 3 . 意識していない場合も、他者の意見を聞いたり、促されたりすると、明確に意識化され、詳細にわたって説明できる傾向にある
- 4 . やる気に影響する要因として、教師に関わるものが多い

上にも述べたように、学生の授業に対するやる気に影響する要因として、教師に関わるものが非常に多く、顕著にかつ詳細に表れたといえる。そこで本調査では、より多くの学生に調査をし、やる気の要因となるものを抽出し、分類する。さらに、教師に関わる要因について詳しく分析し、外国語の教師として学生のやる気を高めるために、何ができるのかを考える。

4．調査 I

4 - 1．調査方法と内容

関西の私立大学で英語を必修受講している 1 年生101名を対象にアンケート方法で行った。まず、同じ外国語の複数の授業について、やる気が異なるかどうかを尋ねた。その後、やる気が異なると答えた場合、「何によって授業に対するやる気は変わるとおもいますか」の 1 問を自由記述形式で記した。

4 - 2．調査目的

予備調査より、同じ外国語の授業であっても、それぞれの授業に対してやる気が異なる場合が多いことがわかった。そこで、そのような外国語の授業に対するやる気に影響を及ぼす要因は何かを抽出し、分類することを調査 I の目的とする。

4 - 3．調査結果

4 - 3 - 1．要因の分類

調査の結果、延べ101の要因が出てきた（「やる気は変わらない」6を除く）。それらを、KJ法⁵⁾を用いて、資料 1 のように「教師」「内容」「環境・コース」「その他」の 4 つのカテゴリーに分類した。調査対象は 101名の学生であったが、やる気の原因となるものが複数回答されていたものは、一つずつに分け、それぞれ分類した。分類の結果を資料 1 に示す。なお、資料と以下はすべてアンケートに記された原文のままである。

資料 1 を見てもわかるように、学生が授業に対するやる気の原因と考えているものの中で、圧倒的に多かったものは、「教師」に関するものである。101の要因のうち、半数以上の56を数えた。詳細については、後に

述べる。

次に、延べ数で多かったのは、授業の「内容」に関するものであった。その中で「興味を持てる内容か」「自分の興味や関心の度合い」「リスニングは得意だがスピーキングは苦手だから」「役に立つ内容か」などの題材に関するものが17、「自分のレベルにあっているか」「簡単すぎるとやる気が出ない」「わかる単語が出てきたらやる気が出る」などの難易度に関するものが9あった。この「内容」には、学生個人の好き嫌いに関するものも含まれる。山口(1995)は「教師との心理的距離が教科の好き嫌いを決めていることもある」(p106)と述べており、今回の調査のみからはその因果関係は明らかではないものの、教師が関わる可能性を示唆している。

また、コース全体の運営に関する13の要因があがった。「予習が大変なものはやる気が出ない」「出席が重視されるか」「評価が明確であるか」などである。これらは教師がその場で判断して、臨機応変に対応すれば良いものだが、今回の調査対象者が受講している授業は、カリキュラムがデザインされており、評価方法、出席、遅刻などの扱い、また授業の進め方などの詳細が担当教員ではなく、あらかじめ決められているものであるため、「環境」とした。

「その他」に分類したものには、「授業が楽しいと思えるかどうか」「授業に対する満足感の違い」「良い成績を取りたいという思い」などが7つあった。

最後に、全てのクラスでやる気は変わらないとの回答が6あった。

外国語の授業へのやる気に影響を及ぼす要因は何かを抽出し、分類することが目的の今回の調査であったが、以下の答えが得られたと考える。

まず、学生の授業に対するやる気の要因となるものは、いくつかのカテゴリーに分けられる。今回は、「教師」「内容」「環境」「その他」「やる

気は変わらない」の大きく4(+1)つに分けられた。また、その中で「教師」という要因が、延べ数ではあるが半数以上を占め、大変大きな影響力を持っていることがわかった。これは、学生の授業に対するやる気の要因として「教師」が大きな影響力を持っているというDörnyei(2001)の説と予備調査の結果を後押しするものである。

さらに、この「教師」というカテゴリーの中の56の要因は、さらに細かく分類できる。そこで、教師の存在、態度、工夫などが学生の授業に対するやる気に大きく影響することがわかった今、具体的にどのようなものが影響力を持っているのか、細かく見ていくことにする。

4 - 3 - 2 . 「教師」に関わる要因の詳細

Dörnyei(2001)は、学習者の動機に関わる教師の影響力を整理する有用な方法として、4つのカテゴリーに分ける考え方を示している(p35)。それは、“personal characteristics of teachers” “teacher immediacy” “active motivational socialising behaviour” “classroom management”とよばれるものである。そこで、今回の調査より得られた「教師」に関する要因を、このDörnyei(2001)の4つのカテゴリーに分類し、資料2に示した。資料2は、資料1の「教師」の部分のみに注目したものである。なお、今回の調査からは4つのカテゴリーのうち“classroom management”に当てはまるものは回答が得られなかったため、3つのカテゴリーに分類した。

4 - 3 - 2 - 1 . Personal characteristics of teachers

Dörnyei(2001)では、“personal characteristics of teachers”を教師の“motivation, commitment, warmth, empathy, competence”などとしている。今回の調査より得られたものの中では、56のうち30の要因が当てはまると考えられ、4つのカテゴリーの中では最も多かった。表1に

要因の例を学生原文のままです。

まず、他の3つのカテゴリーと比べて特徴的だったのは、延べ30の要因があがった中で、重なる要因が多かったことである。特に、「先生のキャラクター」「先生の雰囲気や熱意」「先生のやる気」という要因は、表の中では一要因としてあがっているが、いずれも3つ以上回答があがった。「先生のキャラクター」や「先生の雰囲気」などの回答から学生の言わんとすることは理解ができて、現場に立つ教師としては、それがどうすれば学生に伝わるのかと考えると、答えは容易には見つからない。しかし、このような教師の人間的な魅力に注目している研究はこれまでも少なくない。中村(1994)は「教師の人間としての豊かさ・暖かさを伝達することによって、生徒の学習意欲と学習活動を刺激」(p125)する必要性を述べているし、河村(2002)も「子どもたちとうまく対応している教師は、勢力資源として<教師の人間的魅力>、<教師役割の魅力>を、対応を通して子どもたちに伝え、感じさせていた」(p59)と述べている。今後は、教師の人間的魅力を伝える具体的な対応の仕方、ソーシャル・スキルなども詳しく検討していく必要があると思われる。

表1

Personal characteristics of teachers (motivation, commitment, warmth, empathy, competence)

N	例
30	<ul style="list-style-type: none"> ・先生のキャラクター ・テンポよく話してくれる先生の方がやる気が出る ・先生の雰囲気や熱意 ・先生のやる気があるかないかで、自分のやる気も変わる ・教師の授業に対する意欲が見られたり、教え方が良かったりすると生徒も授業を受けやすく、興味も持つことがで

きる

- ・（先生が）授業を積極的にしているか、していないか
- ・先生の学生に対する態度で、学生のやる気が左右される
- ・先生の態度や授業中の雰囲気
- ・先生の熱意による。話しやすかったり、校内でも気軽に接することができる、距離も近づくし、話しやすい

ほか

4 - 3 - 2 - 2 . Teacher immediacy

これは、具体的には、“addressing students by name、humour、moving around、personal topics”などとされている。調査の結果の中からは、20の要因があてはまると考えられる。表2にその例を示す。

「生徒と距離をおかずに接してくれる」「一人ひとりによくコミュニケーションをとろうとしてくれる」「宿題にコメントしてくれる」などをみてもわかるように、教師がいかに学生と積極的にコミュニケーションをとろうとしているか、と言い換えられるだろう。教師が学生とコミュニケーションを積極的にとろうとしているかどうかについて、学生が、「一人ひとりをよく見ている」「気軽に話せる」「授業と関係ないことなどを話してくれる」「宿題にコメントをくれる」などという教師の具体的な行動から感じ取っているのは大変興味深い点である。このように考えると、4-3-2-1で述べたpersonal characteristics of teachersとteacher immediacyとの大きな違いは、teacher immediacyにあげられた要因は、教師の具体的な行動であることが多く、言い換えればどの教師も努力してできることである。これまでの研究にも、学生が意欲をもって学習できるようにという思いから、学生一人ひとりの話を丁寧に聞く、どんなに忙しくても学生との会話を優先させるというような具体例を紹介しているもの（岡田：2003）がある。さらにこのような具体的な行動や態度を明らかに

することができれば、外国語教師への重要な提言となりうるだろう。

表 2

Teacher immediacy (addressing students by name, humour, moving around, personal topics)

N	例
20	<ul style="list-style-type: none"> ・ 先生が生徒と距離を置かずに接してくれている ・ 先生が生徒一人ひとりとよくコミュニケーションをとろうとしてくれていて、楽しい雰囲気を作ろうとしている ・ 生徒 1 人ひとりをよく見ていて、熱心に指導してくれる ・ 先生と話しやすいか、先生の雰囲気によってかわる ・ 接しやすい先生とそうでない先生がいるから ・ 先生との相性 ・ 先生の人間性、自分がとっつきやすい先生なら気軽に話せるはずで、やる気も出る ・ 先生がおもしろいから ・ 提出した宿題に先生がコメントしてくれると頑張ろうと思う ・ 授業と関係ないことなど（英語などのこと）を話すほうがおもしろく、それがプラスになると思うのでやる気が出る <p style="text-align: right;">ほか</p>

4 - 3 - 2 - 3 . Active motivational socialising behaviour

これは、“modeling、task presentations、feedback reward system”などとされている。表 3 に調査 より得られた要因の例を示す。

例をみてもわかるように、これは授業の成績、テストの点数、評価に関係するものと考えられる。調査 では 6 つあがった。これは予想以上

に少なく、意外な結果であったと言える。実際のところ、日ごろ学生と授業などで接していると、極端に点数、成績、単位ばかりを気にする学生が少なくない。筆者らが学生たちから受ける印象では、成績や点数だけのために頑張っているという意見も少なからず出るのはないかと考えていたのである。しかしながら、この結果だけを見るとそのような学生は少なく、教師との関わりや授業内容などでやる気が変わると答えた学生が大変多かったことは、教師としては嬉しい誤算であったと言えよう。

表 3

Active motivational socialising behaviour (modeling, task presentations, feedback reward system)

N	例
7	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の点をくれるかどうか ・ 先生の気分で成績がつくものはやる気が出ない ・ 頑張っただけ、評価してくれる先生のもはやる気が出る <p style="text-align: right;">ほか</p>

5 . 調査

5 - 1 . 調査目的

予備調査より、それぞれの外国語授業に対してやる気が異なることがわかり、教師が与える影響が大きいという結果が得られた。結果として、個人の嗜好や価値観、性格などに関わる内容のものが多かったため、さらに、調査 において、より多くの学生へやる気が異なる要因を自由記述形式で質問したところ、教師に関わる要因が半数以上を占めることがわかった。そこで、調査 では、教師に関わる要因のみに注目する。予

備調査、調査、先行研究より、教師の態度や行動に関する質問と授業に対するやる気の有無をたずねる質問を、クローズド・クエスチョン（yesまたはnoで回答する質問）方式でアンケート調査する。最終的に、調査で得られた教師の具体的な行動や態度が、実際に学生のやる気に影響しているのかを検証することを目的とする。

5 - 2 . 調査方法

調査は、関西の私立大学で英語を必修受講している1年生101名を対象にアンケート方式で行った。予備調査及び調査の結果、学生のやる気に関わる要因として、教師のさまざまな行動や態度、指導法などがあがった。そこで、その中から共通点が多く、客観的に答えやすい項目を抽出し、外国語教師の行動や態度に関して、クローズド・クエスチョンを8問作成した。さらに、その授業に対してやる気をもって取り組んだかどうかを同様に、クローズド・クエスチョンで調査した。

仮説：yesの数が多い教師の授業ほど、学生たちはやる気を持って取り組んでいるのではないかと

5 - 3 . 調査内容

8つの質問は、予備調査、調査の結果から得られた結果をもとに、できるだけ客観的に学生が回答できるようなものとした。以下に記す。

- 1 . 先生が学生の名前を覚えているか
- 2 . 授業中、学生を指名する際、名前を呼ぶか
- 3 . 授業中、個人やグループに声がけをするか
- 4 . 授業中口頭で、または提出物やプリントなどで学生を誉めることがあるか
- 5 . 課題や提出物、エクササイズなどにフィードバックがあるか
- 6 . 授業内容に関して質問があれば、個人的に質問するか

7. 授業外で機会があれば、その先生と雑談をするか
8. 先生と学生という立場の違いはあるが、人間として対等だと感じるか

1～5の質問は、予備調査（予備調査結果、
、
）で顕著に表れた「先生が学生の名前を覚えているかどうか」、調査
でみられた「教師からフィードバックあるかどうか」などの、教師側の行動が学生のやる気
にどう影響を与えるかをみる質問とした。

6～8は、学生側の教師の捉え方を問うものとした。予備調査結果
にもあるように、自己開示が学生のやる気とどう関連しているかがわか
るように、「機会があれば先生と雑談するか」「個人的に質問するか」と
いう質問を設けた。また、山口（1995）は教師の指導態度として 権威
的態度、 民主的態度、 強制的態度、 情熱的態度、 放任的態度、
受容的態度、 拒否的態度、 評価的態度などを挙げている（p13）。
教師と学生の心理的距離の違いによって、やる気に違いが出るかをみる
ため、「先生と学生という立場の違いはあるが、人間として対等だと感じる
か」という質問を最後に設けた。

5 - 4 . 調査結果

図1の結果からもわかるように、yesと答えた項目が多い教師の授業ほ
ど、学生たちがやる気を持って取り組んでいることがわかる。例えば、
8つの項目の中でyesの数が1～4である教師の授業にやる気をもってい
ると答えた学生たちは、20%ほどで横ばい状態である。が、5つ以上の
項目にあてはまる教師たちの授業では、やる気をもっていると答えた学
生たちの割合が急増する。つまり、質問項目としたようなことを教師が
心がけていれば、授業にやる気をもつ学生の割合が高いということであ
る。ここで、5つ以上の項目にあてはまる教師たちとは、少なくとも、

学生を個として尊重し、個々と関わりを持とうとしているといえよう。学生と授業内外で積極的にコミュニケーションをとろうとしており、教師として授業内容のみについて教授するのではなく、人間として学生と接しようとする努力もいえる。特に、8つの全項目にあてはまると答えられた教師たちの授業では、96.7%の学生たちが、授業にやる気をもてると回答している。ほぼ100%に近い数字であり、教師の態度や姿勢、取り組みが、いかに学生のやる気に影響を与えているかが明らかである。

上述の8問の質問にある内容の多くは、必ずしも教師にとって難しいことばかりではない。むしろ、教師の心がけひとつでできることが多い。例えば、最も多くの学生が賛同した、名前を覚えているかどうか、は教師の努力次第でできることである。この点に関しては、苦手意識を持つ教師も少なからず存在するが、名前を覚えているかということよりも、名前を覚えようと努力しているか、ということのほうが大切なのではないだろうか。ローマン(1987)も「名前を覚えているということは、学生を個人として認めていることを学生に伝えるための、大学教授にできる唯一の最も大切なことからである」(p89)と述べている。また、授業中の声かけや、提出物に対するコメントも教師のやり方次第である。意欲と満足を高めるために、学生との関係を促進するための方法として、ローマン(1987)は学生の名前を覚えることだけでなく、学生を個人としてみていること、そして関心をもっていることを示すことができれば、ラポールの促進に役立つと述べている。ラポールが確立されれば、学生は更に授業に対してやる気を持ち、結果的に、対象科目のやる気にもつながるといえることが、本研究より明らかになったといえる。

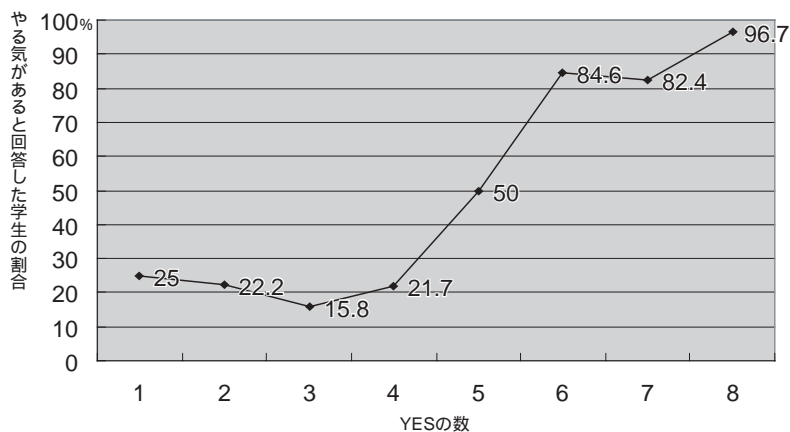


図 1

6. まとめと今後の課題

ウラッドコースキー（1991）も述べているように、教師は、学習者の動機づけを新たにつくることはできない。実際のところ、誰も他人の動機づけをつくることはできない。しかし、教師は物事を魅力的なもの、刺激的なものにすることはできる。その物事とは、本研究においては大学における外国語の授業であり、その方法とは、古来教育効果を左右するものとして注目されている学生と教師のラポールにあることが改めて示されたと考える。そして、そのラポール形成のために、教師として日々の小さな努力でできることが、本研究では少ないながらもいくつか示された。それは、学生の名前を覚える努力をするというような、教育界に限らない人間関係における常識であり、自己開示をするというような、教師と学生という役割を超えた真のコミュニケーションであるといえる。「大学は高校までとは違うのだから」「これは、仕事なんだから、割り切ろう、自分を暴露することはない」（ウラッドコースキー：1991：p169）というような大学教師の声に対して、ウラッドコースキーは、教

師がそうした姿勢を保ち続けるならば、学生たちも同じようになり、学生との本当の接触、すなわち真のコミュニケーションをはかることはあり得なくなると述べている。

本研究から学生のやる気は少なからず教師によって左右されることがわかった。今後は、具体的に教師に何ができるかを考察し、提言することが課題である。予備調査と調査の結果より、調査において8項目の質問を作成したが、その8項目に代表されるような教師としてできることが、まだあるはずだろうと思われる。また、学生のやる気は実際に学習成果にどのように関連しているのであろうか。教師によって、学生のやる気はどのように高まり、また、そのやる気がどのように学習成果に結びつくのであろうか。教師のどのような行動が学習者の動機づけとなり、肯定的な学習成果が得られるのかを調査することを目標としたい。

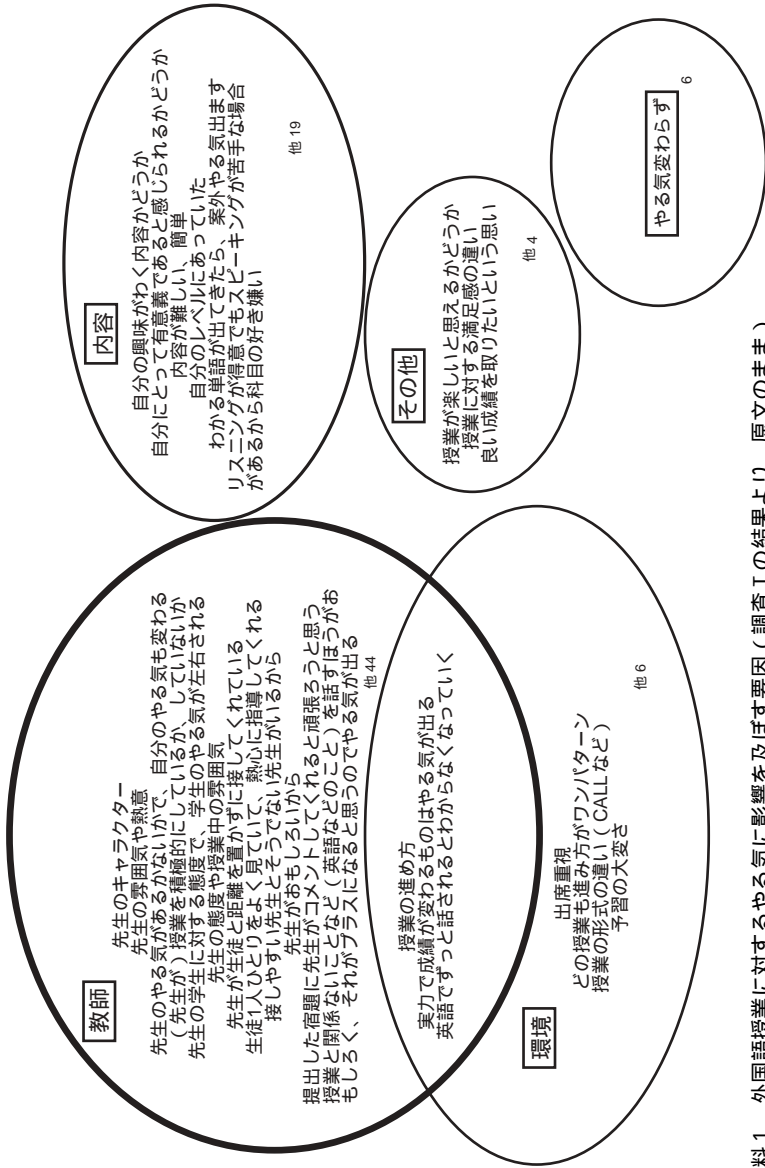
注

- 1) motivation that deals with “behaviour performed for its own sake in order to experience pleasure and satisfaction”.
- 2) motivation that deals with “behaviour as a means to end, or actions carried out to achieve some instrumental end, such as earning a reward or avoiding a punishment”.
- 3) Dörnyei(1999)がTESOL'99における発表の際、フロアからの質問に答えて言ったものとして紹介。
- 4) 1つのグループは体調不良により1人当日欠席。
- 5) KJ法とは、アイデアや意見などの雑多な情報を1枚ずつ小さなカードに書き込み、それらのカードの中から似通ったもの同士を数枚ずつ集めグループ化し、小グループから大グループへと組み立てて図解していく問題解決法である。開発者の川喜多二郎氏の頭文字をとってKJ法と言う。

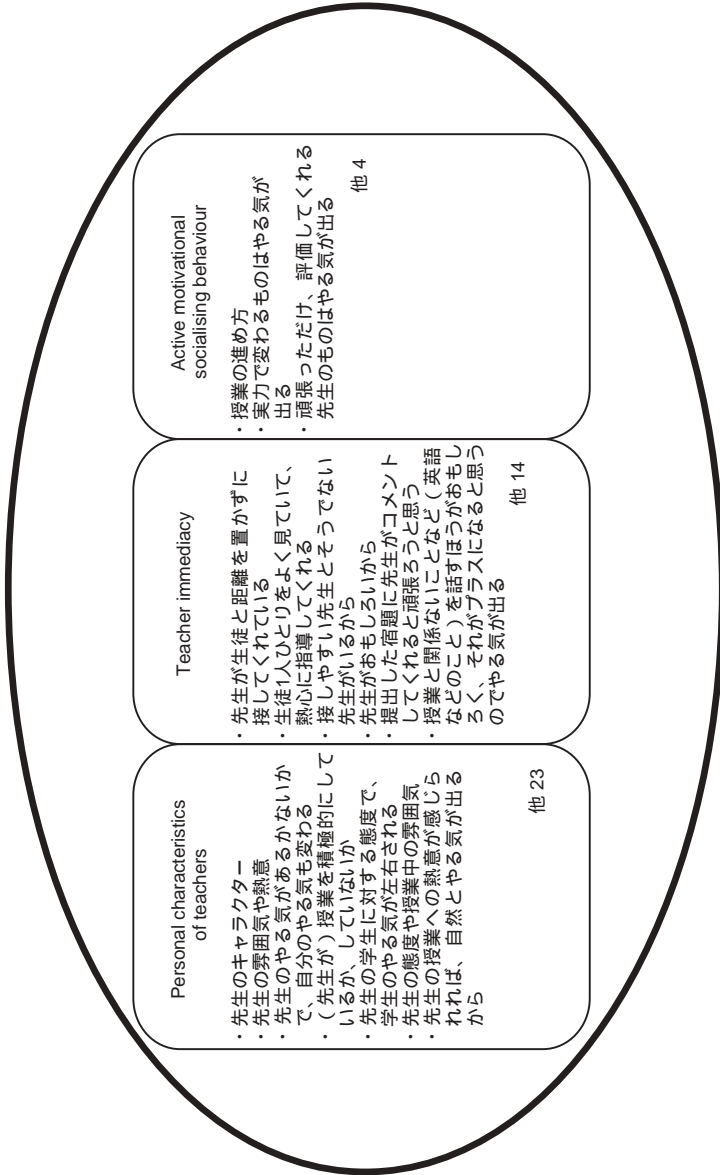
参考文献

- 1) 榎本博明 (2004) 『自己開示性』 AERA Mook, Special Number 96, p.10 - 13
- 2) 岡田礼子 (2003) 『今どきの大学生を教えるという大仕事』 月刊「英語教育」大修館
- 3) 河合靖 (1999) 『外国語自律学習研究の3要素 動機付け、学習スタイル、学習ストラテジー』 言語文化部紀要37, p.67-85
- 4) 河村茂雄 (2002) 『教師のためのソーシャル・スキル 子供との人間関係を深める技術』 誠信書房
- 5) 中村公子 (1994) 『授業での学習者と教師のコミュニケーション』 年報フランス研究28, p.123-134
- 6) 廣森友人 (2005) 『外国語学習者の動機付けを高める3つの要因：全体傾向と個人差の観点から』 大学英語教育学会紀要(第41号), p.37-50
- 7) 八島智子 (2004) 『外国語コミュニケーションの情意と動機 研究と教育の視点』 関西大学出版部
- 8) 山口正二 (1995) 『生徒の教師認知における心理距離に関する実証的研究』 風間書房
- 9) レイモンド・J・ウラッドコースキー (1991) 新井邦二郎・鳥塚秀子・丹羽洋子訳 『やる気を引き出す授業 動機づけのプランニング』 田研出版株式会社
- 10) ローマン・J 『大学のティーチング』 (1987) 阿部美哉監訳 玉川大学出版部
- 11) Dörnyei, Z. (2001) *Teaching and Researching Motivation*. Longman.
- 12) Ehrman, M., & Oxford, R. (1995) Cognition Plus: Correlates Of Language Learning Success. *The Modern Language Journal*, 79, p.67-79
- 13) Jourard, S. M. (1971) *Self-disclosure: An experimental analysis of the transparent self*. New York ; Wiley-Interscience
- 14) Noels, K., Clément, R., & Pelletier, L. (1999) Perceptions of Teachers' Communicative Style and Students' Intrinsic and Extrinsic Motivation. *The Modern Language Journal*, 83, p.23-34
- 15) Oxford, R., & Shearin, J. (1994) Language Learning Motivation: Expanding the Theoretical Framework. *The Modern Language Journal*, 78, p.12-28
- 16) Deci, E.L., & Ryan, R. M.(1985) Intrinsic motivation and self-determination in human behavior. *New York: Plenum*

- 17) Vallerand, R. J. (1997) Toward a hierarchical model of intrinsic and extrinsic motivation. *Advances in Experimental Social Psychology*, 29, p.271-360



資料1 外国語授業に対するやる気に影響を及ぼす要因(調査Iの結果より 原文のまま)



Personal characteristics
of teachers

- ・先生のキャラクター
- ・先生の雰囲気や熱意
- ・先生のやる気があるかないかで、自分のやる気も変わる
- ・(先生が)授業を積極的に行っているか、していないか
- ・先生の学生に対する態度で、学生のやる気が左右される
- ・先生の態度や授業中の雰囲気
- ・先生の授業への熱意が感じられれば、自然とやる気が出るから

他 23

Teacher immediacy

- ・先生が生徒と距離を置かずに接してくれている
- ・生徒1人ひとりをよく見ていて、熱心に指導してくれる
- ・接しややすい先生とそうでない先生がいるから
- ・先生がおもしろいから
- ・提出した宿題に先生がコメントしてくれると頑張ろうと思つ
- ・授業と関係ないことなど(英語などのこと)を話すほうがおもしろく、それがプラスになると思つのでやる気が出る

他 14

Active motivational
socialising behaviour

- ・授業の進め方
- ・実力で変わるものはやる気が出る
- ・頑張っただけ、評価してくれる先生のものばやる気が出る

他 4

資料 2 「教師」に関わる要因の詳細 (調査 I の結果より 原文のまま)